

環境史からみた信長の時代 I

－桶狭間の戦い－

高 橋 学

I. 環境史のあけぼの

これまで、著者は環境史・土地開発史・災害史の観点からいくつかの論文を書いてきた¹⁾。そのなかで、先史・原史時代はもとより、歴史時代に入っても環境は変化しており、それにより土地開発や災害が変化してきたことを述べた。考古学的な発掘調査が大規模にしかも数多く行われるようになったことを背景に、狭い意味の遺物（土器や石器など）、遺構（住居址や墓）の調査から、生産域を含む集落や、集落間の関係が視野に入ってきたことの影響が大きい²⁾。また、従来は研究対象とは思われなかった中世やそれ以降の時代にも光が当てられるようになってきた。さらに、自然科学的な分析が積極的に導入され、これまでには問題にされてこなかったことにも焦点が当てられるようになってきたことがあげられる。火山灰や洪水に埋もれた遺跡や、地震による断層や液状化痕跡³⁾などの検出により、災害史や再開発という観点からの調査も実施されるようになってきた。

そのような中で、著者が提唱した平安時代末葉の10世紀末～11世紀頃にかけて生じた河床低下による完新世段丘Ⅱ面（野）と現氾濫原面（河原）の分離⁴⁾については、これまで宇野隆夫（1982）⁵⁾、黒田日出男（1984）⁶⁾、戸田芳実（1991）⁷⁾、木村茂光（1992）⁸⁾らの研究の背景の説明として歴史研究者に受け止められた。特に、その観点は石井進や網野善彦らに注目されるようになり、日本史研究会の特別発表⁹⁾を行ったことで、これまでほとんど無関係とされてきた環境に関わる視点が、文献史研究者の中に取り入れられるようになった。当時、文化庁調査官であった服部英雄がオーガナイズして各地に広まった古代荘園絵図や中世荘園の現地調査には環境史的な視点が盛り込まれるようになったのである。大分県国東半島周辺の田染荘^{たしぶ}の調査¹⁰⁾を皮切りに、讃岐国弘福寺領山田郡田図^{ぐふくじ}の調査¹¹⁾、播磨国鶴荘¹²⁾などのように、文献史研究者がフィールドに出て絵図や文献に記された土地や灌漑水利などの調査を積極的に取り組まれるようになり、自然科学、文献史、考古学の境界を越えた研究が急速に進められた。そして、橋本政良（2002・2005）¹³⁾、飯沼賢司（2004）¹⁴⁾、井上勲（2004）¹⁵⁾、水野章二（2004）¹⁶⁾、水島司（2010）¹⁷⁾、平川南（2012）¹⁸⁾などに代表されるように「環境史」と銘打った研究が続々と公刊されるようになったのである。もちろん、書名に「環境史」との言葉はでここないものの、清水克行（2008）¹⁹⁾、北村優季（2012）²⁰⁾の著書のように「環境史」を十分に取り入れた研究業績もある。

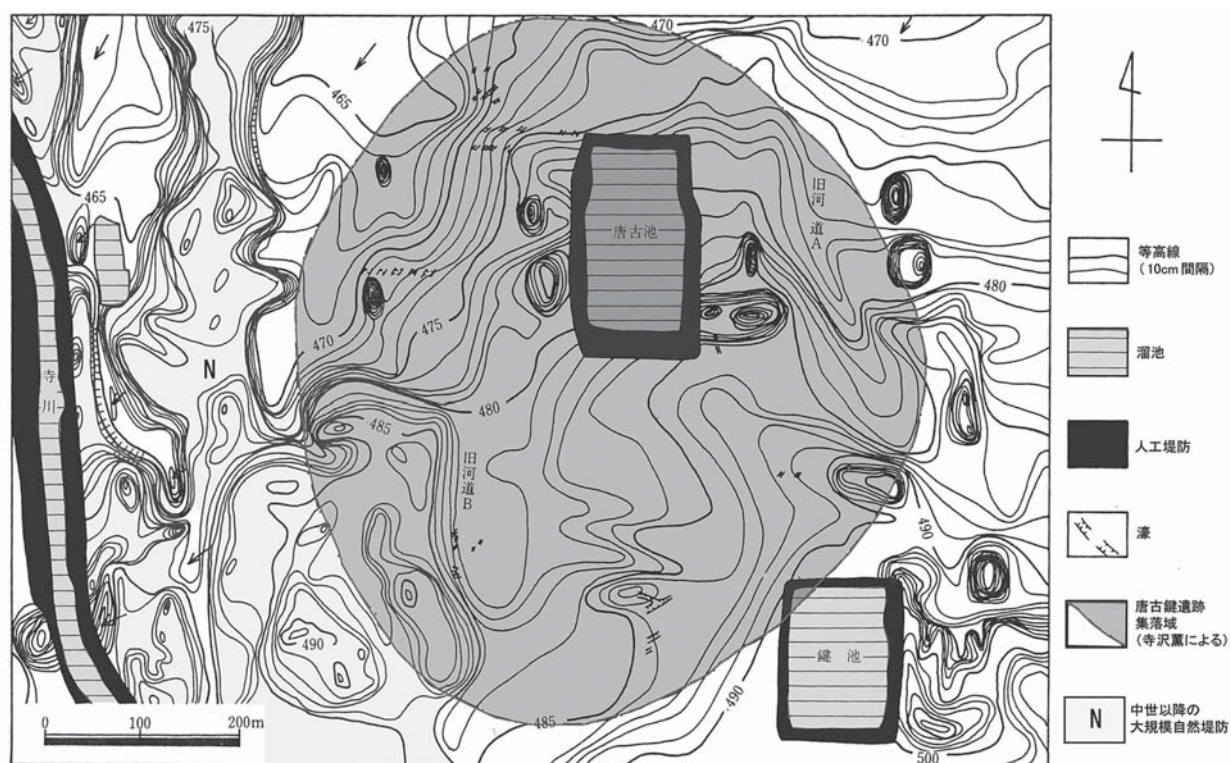
著者は、これまで10世紀末～11世紀の環境変動と都市や耕地における土地開発の様相の変化や災害について検討してきた。また、14世紀頃における新たな灌漑水利システムの導入、15世紀末～17世紀初頭の大規模自然堤防の形成や天井川の形成についても触れてきた。たとえば、下地中分の記録として著名な伯耆国東郷荘絵図^{ほうき}（正嘉2年：1258、東大資料編算所蔵）と、それに隣接した天神川周辺の砂丘に埋没した長瀬高浜遺跡の調査などで、砂丘砂が飛来した時期と停止した時期の土地開発・災害について環境史の観点から述べてきた²¹⁾。

今回の報告では、上記のような視点に立ち、主として戦国期を対象に、その環境史・土地開発史・災害史について検討してみたい。

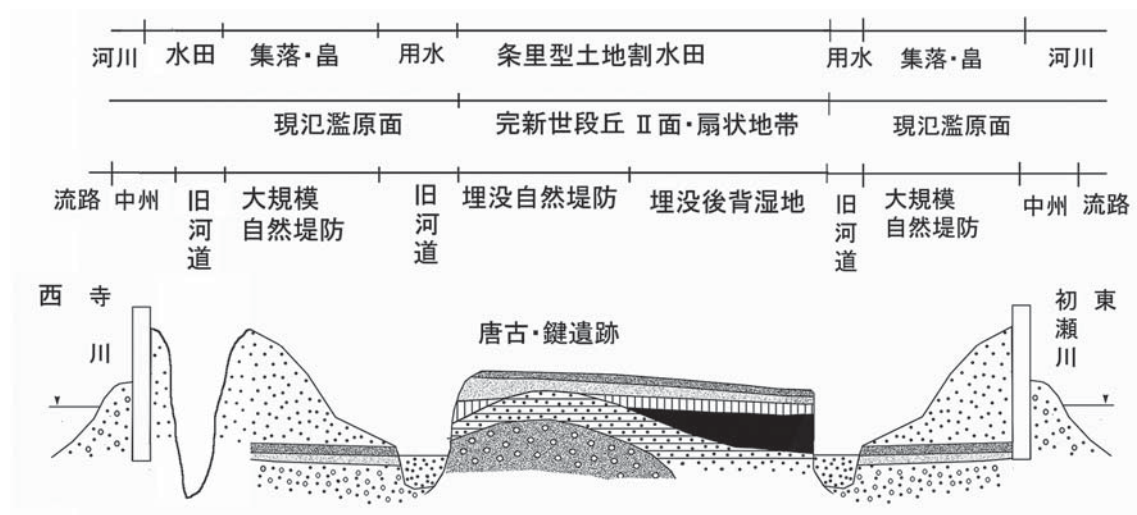
Ⅱ．灌漑システムの変容と大規模自然堤防

これまで、奈良盆地については、弥生時代の唐古・鍵遺跡、古墳時代の巨大前方後円墳、^{まきむく}纏向遺跡、布留遺跡、飛鳥のいくつかの宮址、藤原京址、平城京址、条里型水田、環濠集落などが考古学、歴史学、歴史地理学など様々な観点から検討が加えられてきた。その中で、考古学の八賀晋（1900）²²⁾は、土壤図を引用しながら、土壤と土地開発の関係について検討した先駆的な研究を発表していた。著者が八賀に直接確認した時、八賀は「条里型土地割が残存しているところでは、土壤図に示された地下水環境などが変化していないとの仮説」を前提に、地下水位の高い低湿地から、地下水位が低い高燥な土地に開発が進んだと考えた。それは、まだ水田遺構などが静岡県登呂遺跡でわずかに知られていた時期のものであり、八賀の仮説は当時としてはひとつの見識であったといえよう。しかし、その後、平野の発掘調査が進み、自然科学的な検討も行われるようになり、八賀の仮説は論拠を失うことになった。

著者は第1図、第2図に示したように唐古・鍵遺跡の環境考古学からの検討を行なった²³⁾。そこで注目されたのは、弥生時代前期の集落が存在したのは、現在の平野の微地形と過去の微地形が異なっていることであった。現在、後背湿地と分類される条里型水田の下には、形成時期の異なる埋没自然堤防が少なくとも2種類存在しており、下層に位置する自然堤防の微高地部分には、弥生時代前期の集落が立地していた。また、弥生時代前期末～中期初頭には、遺跡の南東で洪水が発生し



第1図 唐古・鍵遺跡周辺微地形図



第2図 唐古・鍵遺跡周辺の微地形と埋没微地形

南東 - 北西方向に軸が伸びる上層の自然堤防が形成された。その結果、弥生時代前期の集落の立地した自然堤防は、相対的に後背湿地となった。新しい自然堤防を形成した河川は唐古・鍵遺跡の東側を南南東から北北西に流下しており、遅くとも弥生時代中期には人工的な環濠として利用されたことが寺沢 薫²⁴⁾や田原本町の発掘調査²⁵⁾で判明している。また、この時、形成された埋没自然堤防の上には、唐古・鍵遺跡の集落が立地している。そして、弥生時代中期末には、洪水で環濠の大部分が埋没してしまう。その後、環濠は、再掘削されるものの微高地としての土地利用上の利点は減少し、古墳時代前期になると集落域が縮小し、古墳時代後期の前方後円墳が形成される墓域へと変化する。

その後、微凹地部分には条里型地割が施工されるものの、自然堤防の頂部は島状に水田にはならず、14世紀代には在地武士の居館として利用されている。そして、この場所は条里型土地割南北2坪分の範囲が四周を人工的な堤防で囲まれた溜池（唐古池）に利用される。唐古池は、水田に灌漑の必要のない時期に用水から取水し、一時的に水を溜め、必要な時に周囲の水田を潤すのに用いられる。そのために、奈良盆地の条里型土地割に規制された皿池は、周囲の水田よりわずかに高い部分に築かれて、中世後半の以降に形成された新灌漑システムとして機能した。そのため、唐古池だけでなくこのタイプに属する溜池の底からは、弥生時代以降の集落遺跡が発見されることが多い。

他方、やはり条里型土地割に規制された寺川などの河川は、人工堤防で流路が固定されたためなどの理由により、河川流路の近くに大規模自然堤防を形成した。現在、寺川などに沿って、1/25,000地形図で容易に判読できる大規模自然堤防の下層からは、15世紀～16世紀に属する遺物が出土しており、その形成が中世後期以降であることが考えられる。この時期には、琵琶湖の沿岸の野洲川や草津川、大阪河内平野、六甲山地南麓の芦屋川、住吉川、さらには岡山の足守川などで河床が急上昇して天井川形成された時期より少し先立つかほぼ一致する。

古代末～中世初頭の完新世段丘II面と現氾濫原面との分離以降、不自由になっていた河川灌漑が、河床の上昇やそれにとまう地下水位の上昇により状況が改善した。また、大規模自然堤防を形成する砂が大量に堆積することで、その場所は水田としての土地利用が不可能になり、新たに集落や墓地が立地する場所となった。さらに、大規模自然堤防の形成で水田を放棄した場所では、初期には危急食料としてソバが栽培されたり、後にはアブラナや綿花などの商品作物が栽培されたりする

ようになった。大規模自然堤防の縁辺では、砂を一部に人工的に盛り上げ畠として土地利用し、反対に掘り下げたところを水田とする島畠（半田、掻き揚げ田などの呼び名もある）として土地利用された。大規模自然堤防や天井川の形成により、弥生時代や場所によっては古墳時代に形成された自然堤防（場所によっては完新世段丘Ⅱ面と現氾濫原面とを分離させた崖）は、徐々に後背湿地として埋没し微高地としての機能を失い、中世後半にはほぼ後背湿地となった。さらに、地下水が上昇したり、湛水しやすくなったりした後背湿地では、水田区画の一部を掘り下げて溜池とする堀田（掘田）として土地利用された。掘った土は水田面を高くするのに利用され、堀の水は灌漑用水に、そして堀には魚を飼い不足しがちなタンパク源とし、堀底に堆積した魚の排泄物などは、掻き揚げて水田の肥料として利用された。また、ウナギ、キングヨ、ニシキゴイなどの水田漁業へと発展する場合もあった²⁶⁾。

このような場所は湿田あるいは強湿田となり、乾田と比較して反当収量は半分ほどの4～5俵以下になることが多いものの、旱害の際にも確実に一定量の収穫があるために、次年の種粃確保の場所として重要である。また、大規模自然堤防を形成する堆積物が河川の下流の海や湖岸に達した場合、遠浅な水域が形成され、中世後半の古新田や近世の干拓新田開発の背景となった。

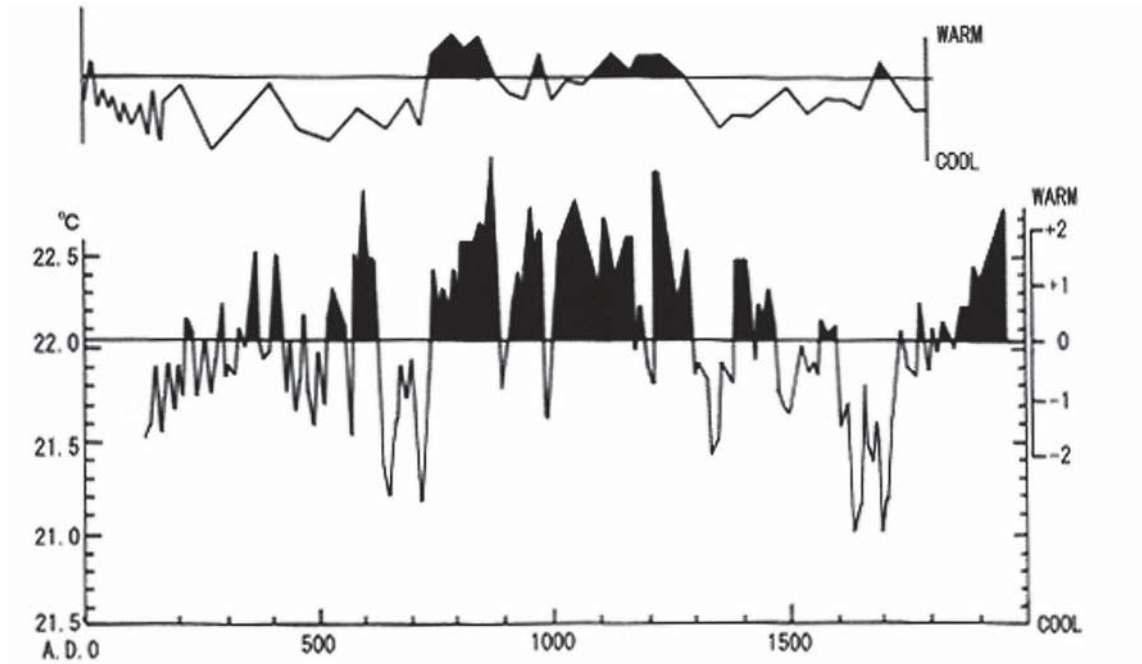
重要なことは、現在、地形図や空中写真から容易に読み取れる土地利用や微地形は、中世末～近世初頭までしか遡ることができない。しかも、小字名や水田呼称は、大正時代以降に行われた呼称の変更がかなりみられ、それを古代はもちろん中世に遡らせることは決して容易なことではない。

Ⅲ．小氷期の開始と土一揆

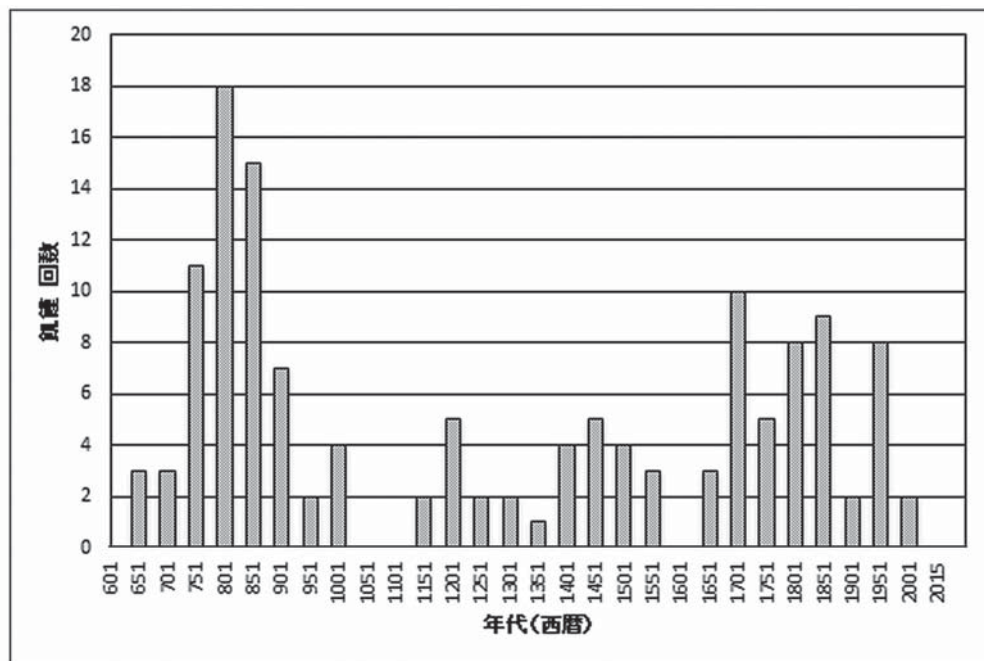
筆者は、北面の武士であった西行の歌などを取り上げ、彼の生存していた時代（12世紀末）の気候が現在よりも温暖であったと報告した。他方、秀吉が彼の絶頂期に催した醍醐の花見は、慶長3年3月15日（1598年4月20日）に実施されており、ここで言うサクラが現在、よく目にするソメイヨシノではなく、ヤマザクラであったことを考慮しても、かなり寒冷な気候であったことが推測できた²⁷⁾。また、この成果は、阪口豊の尾瀬沼における花粉分析²⁸⁾や北川浩之²⁹⁾が屋久杉の年輪で行った $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比に基づく古気候復原とよく一致する（第3図）。

さて、一休宗純が悟りの境地に達し、世阿弥元清が猛烈な勢いで執筆活動を始めたといわれている応永27年（1420）から翌28年にかけては、寛正元年（1460）から翌2年と同様に大飢饉が生じた。通常、天候不順などが生じた時、それが1年間であれば、大飢饉にはなりにくい。それに対して、2年続く天候不順は大飢饉になりやすい。それは、1年目は翌年植えつける種粃を食べても生きていくことが不可能ではないが、2年天候不順が続くと手の施しようがなくなる。これまで、一般に西南日本では旱魃が飢饉の原因と考えられてきた。明德3年（1392）～応仁元年（1467）までに祈雨奉幣10件、止雨奉幣11回が実施された記録がある。これに対し、東北日本では冷害が重大な飢饉の原因とみなされてきた。また、夏の旱魃、秋の長雨、そして飢えた民が都市に流入し、人口が増えることが飢饉の原因であるとする考え方もある³⁰⁾。

第4図は、史料が比較的に数が揃うようになる7世紀後半以降における地震を除いた飢饉の回数を50年ごとに示したグラフである。もちろん、史料の残存状態や記録の仕方など様々なバイアスがかかったものである。しかし、これを観ると11世紀は飢饉の史料が管見の及ぶ限りみあたらない。11



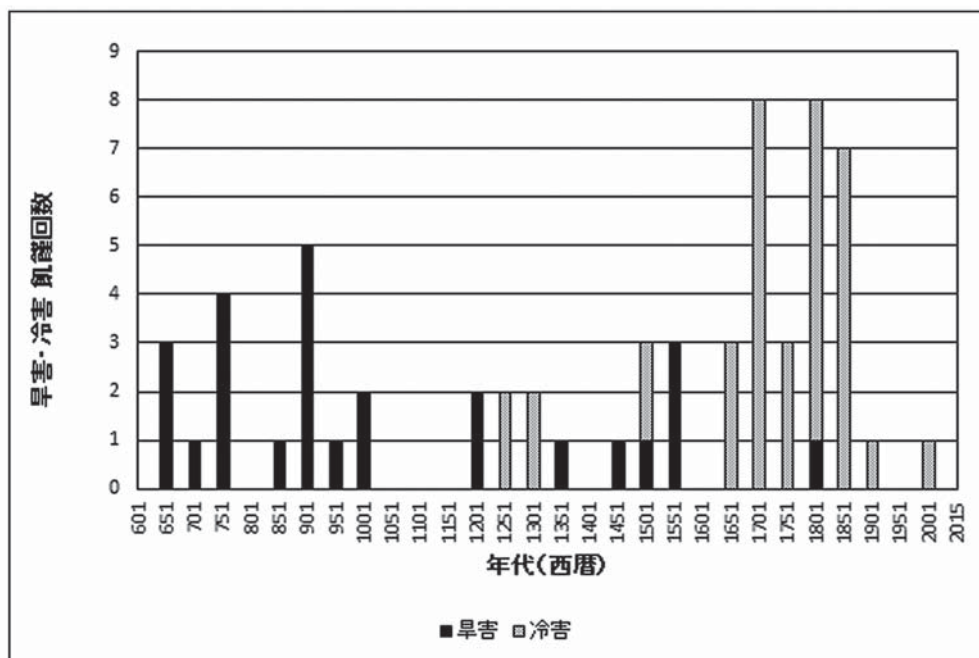
第3図 過去2000年の気候変動



第4図 飢饉の発生回数

世紀は藤原道長に代表されるような摂関政治が始まり、その後、白河上皇の院政が行われた時期にあたる。また、清少納言の「枕草子」や紫式部が「源氏物語」などが著された。さらに、末法思想や浄土への憧れが流行し、平等院鳳凰堂が建立された。通説では、11世紀は現世の頻繁な災害や治安の悪化が浄土思想へとつながったとされており、この結果とうまく接合せず検討の必要がある。この時期東北地方では、前九年の戦い（1051～1062年）や後三年の戦い（1083～1087年）がおき、これらの戦いを経て源氏が東国武士団と主従関係を強めたことで知られている。

さて、飢饉の内容を検討すると、第5図に示したように、大局的な見地に立つと、11世紀～12世

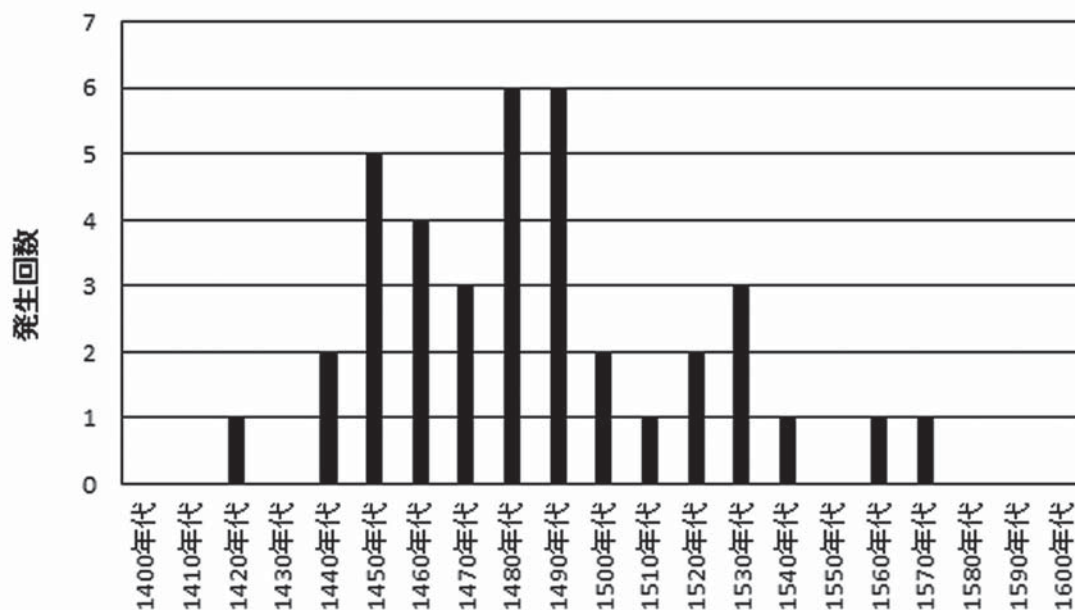


第5図 旱害と冷害

紀を境として、それ以前と以後とでは飢饉の内容が異なる。すなわち、11世紀以前では、旱害を原因とした飢饉が多く、それに対して13世紀に入ると冷害に起因する飢饉が増える傾向が読み取れる。既に、筆者は11世紀頃の気候は温暖で、さらに河川の侵食で河床が低下し、単なる日照りだけではなく地下水位の低下も重要な環境変動であったことを、いくつかの例を挙げて述べてきた³¹⁾。そして、13世紀以降徐々に気候が冷涼化し、17世紀に入る頃には本格的な小氷期が開始したと考えてきた。

15世紀になると凶作、病気の流行、将軍の代替わりなどを理由に徳政を求め、正長の土一揆（正長元年：1428）が発生し、それが畿内一円に波及した。従来存在していた居住場所であった微高地が後背湿地の中に埋没しかけると、居住に適する場所が限られるようになり集村化した。また、大規模自然堤防の形成により新たに形成された微高地にも集村が形成されるようになり自立的・自治的な共同体が形成されるようになった。ここでは、新たな灌漑水利システムを構築しなければならないことや戦乱に対する自衛を目的とした共同体である惣村が作られるに至った。ここでは、独自に惣掟を定めたり、自分たちで警察権を行使したりすることも必要になった。正長の土一揆の翌年（1429）播磨でも土一揆が発生した。嘉吉の徳政一揆（嘉吉元年：1441）では将軍交代時に「天下一同」の徳政を要求し数万人の土一揆が京都を占領した。そして幕府は「徳政令」を発布せざるをえなくなった。その後も、享徳の土一揆（1454）長祿の土一揆（1457）山城の土一揆（1478、1480）などが発生した。年代別に整理すると応仁の乱（応仁元年：1467～文明9年：1477）の前の1420年代1回、1410年代1回、1440年代2回、1450年代5回、1460年代4回。そして、応仁の乱を挟み1470年代3回、1480年代6回、1490年代6回などが発生している（第6図）。農民たちは徒党を組んで、貸し金を業としていた酒屋、土倉、寺院などを襲った。15世紀後半以後になると、幕府はそれ自体の財政難もあり「分一徳政令」を乱発するに至る。このため、一揆の標的となりそうな者達は自衛のための兵士を雇うことになったのである。

また、在京で応仁の乱を戦った有力守護大名たちは、領国の支配の不安のため帰国し、室町幕府は維持できなくなり崩壊した。また、争乱は全国に広がった。さらに、惣村の形成で一体感を強め



第6図 土一揆の発生回数

た荘民は、不法を働く代官や荘官の免職を求めたり、水害、旱害の際に年貢の減免を求めたりして、強訴や逃散などの実力行使が行われ荘園体制の解体も進むことになった。さらに、京都など都市に流入した人々は、略奪することを覚え、後に足軽化していった。このような混乱の中で領国にいた守護代や国人たちは力をつけ、自分たちの権益を守るために国人一揆を結成した。文明17年(1485)に始まった山城国一揆は、畠山氏を国外に追い出し独自の国掟を定め、政務を処理する月行事を設置し、明応2年(1493)まで、自治的な運営体制がとられた。このような動きは、蓮如によって広められた浄土真宗本願寺派が起こした加賀の一向一揆(長享2年:1488~天正8年:1580)にもみられた。幕府が持っていた司法権、警察権、武力による治安維持が及ばなくなれば、それぞれは自衛をせざるをえないのであった。

ところで、黒澤明監督の『七人の侍』(1954)は、外国をはじめさまざまなところで何度もリメイクされた名作映画である。たしかに、この映画は、それまでの歌舞伎の流れをくみ煌びやかな衣装で大立ち回りを演じる映画の武士の概念を一変させた。刀ひとつをとっても、一振の刀で何にも人間が切れるわけでないことから、刀を何振も地面に突き刺しておくという演出をしている。その後、市川崑監督が『股旅』(1973)でアウトローの世界をリアルに描いて視聴者を驚かせたが、『七人の侍』の比ではなかった。映画界にまさに劇的なショックをあたえたものであった。

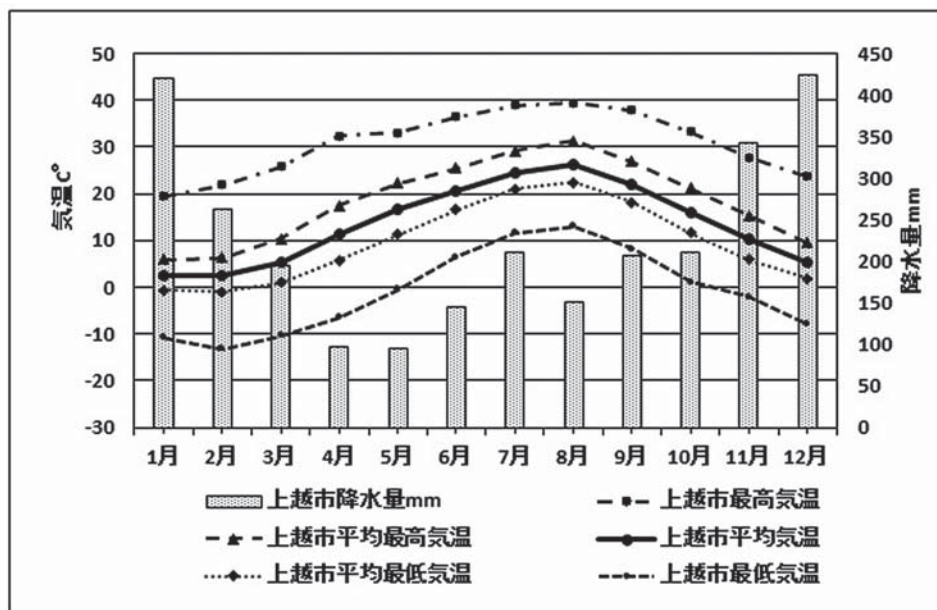
武器を持たない農民が、野伏(野武士)に麦の収穫直後にムラが襲われるのを恐れて武士を雇うとする。時代を秀吉の刀狩(天正16年:1588)以前とすれば、前述のように、農民はもとより、酒屋、土倉、そして比叡山や本願寺などの寺社勢力も武装しており、映画の設定は明らかにおかしい。幕府の地頭をはじめ御家人その郎党といった武士以外にも武装は常識であった。黒澤明が描いた農民のように彼らは弱い存在ではなかった。明治期の北海道における屯田兵のように、武装開拓農民であり、主が小作人やその血縁者を郎党としていたため、兵と農は分離できるものではなかった。また、幕府が治安維持の点で形骸化していた時には、流通業者も武装することが必要であった。

Ⅳ．中世的戦国大名の土着性とその限界

室町幕府の権力が弱体化するなか、幕府の裁判権が無実化する中で、守護大名や新興の戦国大名たちは、実力で領土の拡大や保全を図るようになっていた。15世紀～16世紀に、農民が武装することは常識はずれのことではなかったのである。たとえば、四国の長宗我部氏の下では、普段は農民として田畠を耕しているものの、領主から動員がかかれば直ちに武器や鎧を携えてはせ参じることを期待された「一領具足」と呼ばれる半農半兵の集団がいた。また、守護大名であった後北条氏、武田氏、今川氏、六角氏、毛利氏などは寄親・寄子制を採っており、そこには「国人」と呼ばれる土着の地侍が存在し、武装した農民がいた。また、土一揆で都市に流入し略奪に目覚めた人々は、足軽化した。

(a) 上杉謙信

長尾景虎は、武田信玄より9年遅い享禄3年（1530）に生まれた。越後の守護上杉氏の守護代であった景虎は、北条氏により追われた上杉氏のあとを継いで関東管領・守護となり上杉謙信と名することになる。景虎は、天文20年（1551）に越後を統一したが、様々な点で強い土着性を持っていた。第一に越後という領国の性格上、気温は太平洋側と比較して意外に差がないものの、旧暦の11月～4月には、積雪が多く身動きが取れない（第7図）。ただし、その雪解け水が得られるために田植え時期に水が不足するようなことはなく、領国は肥沃な土地に恵まれていた。景虎は、信長に先駆けて天文22年（1553）に関東管領上杉氏の家来として上洛し、13代將軍義輝から従五位下彈正小弼に任命された。また、謙信となってからの永禄2年（1559）4月にも上洛し、義輝から従四位下近衛少将に任名された。謙信は、室町幕府のシステムに組み入れられていった。しかし、謙信は、京都に常駐することではなく、すぐに越後に帰国している。それは、謙信の兵が基本的に兵農分離をしていなかったために、田植えや稲刈りといった農繁期には重要な労働力として領国に存在することが求められたためである。また、基本的に春日山城を居城とした。



第7図 新潟県上越地方の気候（1981～2010年）

この時期、名目上の任官だけで領国が安堵されているわけではない。常に隣国との間で領域争いに備えなければならなかった。反対に飢饉で食糧が不足すれば、他の領域に侵入することで飢えをしのぐのが常識であった。また、兵は戦いになると武器や武具、食糧も持参しなければならなかった。そして戦いに勝てば、その地域での略奪、狼藉（人を拉致し収穫物や金品の強奪）が許されていた。

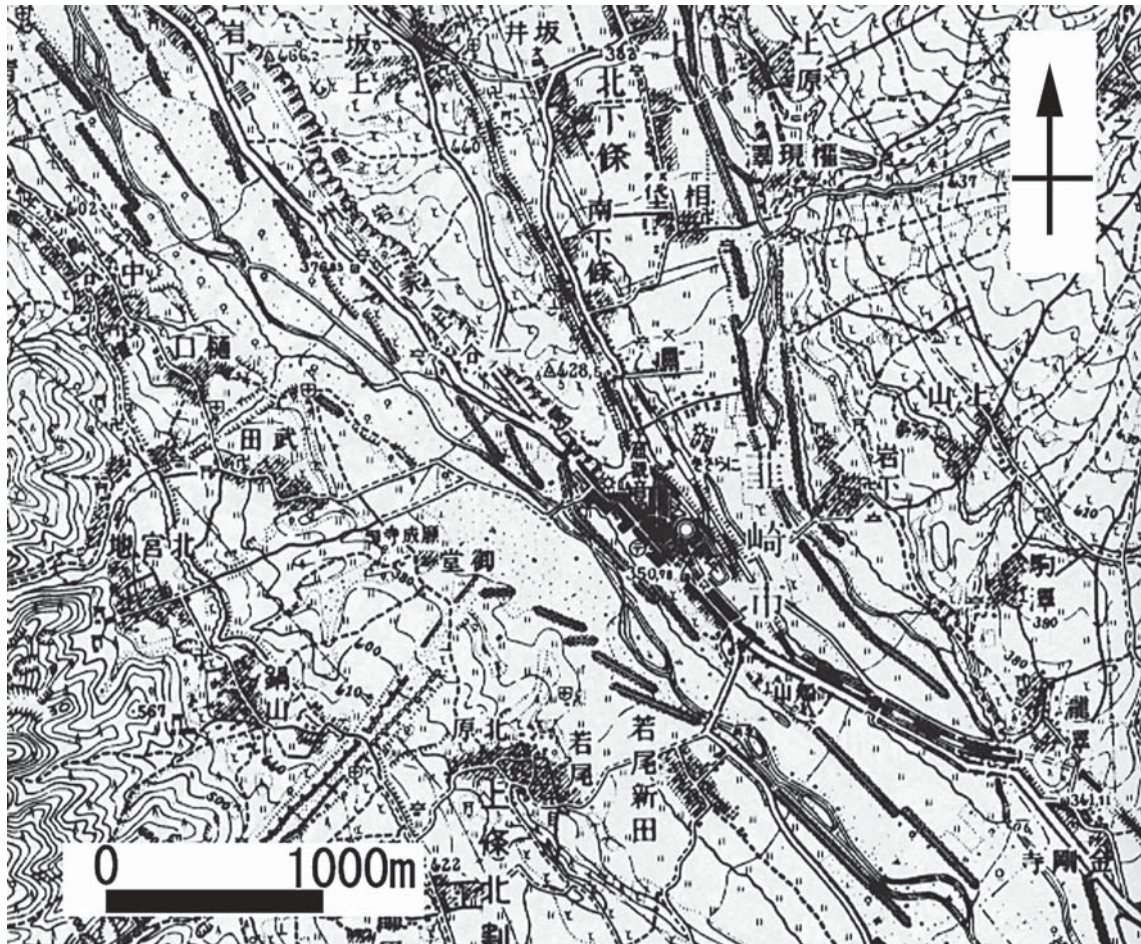
上杉謙信は、天文 22 年（1553）布施の戦い、天文 23 年（1554）犀川の戦い、弘治 2 年（1557）上野原の戦い、永禄 4 年（1561）八幡原の戦い、永禄 7 年（1564）塩崎の対陣まで 10 年にわたり、北信濃で武田信玄と川中島の戦いを繰り返した。ここで注目されるのは、季節的には積雪期や農繁期を避け、場所としては、河原や原という耕地化されていないところ選ばれている。どんな場所においても合戦ができるわけではない。農業生産に関わりの少ない「河原」「野」「原」などにおいて戦いは許されても、田植え直後の水田や収穫前の水田や畠において作物を踏み荒らすような行為は、心情的にも許されるものではなかったのである。支配者は、兵であり農民でもある領民の支持がなければ領国が維持できなかったと考えられる。

(b) 武田信玄

さて、明応 7 年（1498）になると、M8.5 以上の明応東海地震が発生し、浜名湖が淡水から汽水湖へと変化した。永正元年（1504）、永正 9 年（1512）、永正 15 年（1518）には飢饉が連続して生じた。その 3 年後の大永元年（1521）に、守護を務めた甲斐源氏の流れをくむ信虎の嫡男として信玄は生まれた。すでに信虎の段階で甲斐は統一されたが、自然条件が厳しく、常に隣国の信濃や駿河などへ勢力拡大を狙っていた。信虎は天文 6 年（1537）には駿河の今川氏と甲駿同盟を結んだ。しかし、家督相続をめぐる信玄と対立し、信虎が天文 10 年（1541）駿河に追放されてしまった。信玄は、天文 16 年（1547）に今川氏を真似て家法「甲州之法度次第」を作り領国支配を確立した。そうすることで、室町幕府の将軍の支配下から独立した存在になろうとした。また、天文 23 年（1554）になると、婚姻に基づき武田信玄、北条氏康、今川義元の間で甲相駿三国同盟（善徳寺の会盟）が成立した。

甲斐の中心である甲府盆地には、富士川の支流である釜無川や笛吹川の形成する扇状地帯が発達している。これらの扇状地帯は、完新世段丘Ⅱ面と現氾濫原面（河原）とに分類される。河川勾配は急であるため、現氾濫原面には下流側に向かい「ハ」の字型に窄まる不連続堤（霞堤）で河川が制御された（第 8 図）。雪解けや降雨で水量を増した河川は人工堤防の規制を受けて、上流側に向けて氾濫する。この時、傾斜が急なため流速が著しく落ちることと、洪水は現氾濫原面に限られる場合が多く完新世段丘Ⅱ面上にまでおよぶことは少ない。これらの不連続堤は、信玄堤と称されており信玄の時代から行われていた治水方法と考えられる。信玄堤（霞堤）は扇状地帯のような急傾斜であり、完新世段丘面があり、完新世段丘崖の存在によって、それより内側には洪水が及ばないことが大前提であり、地形の傾斜が急であるからこそ、逆流させることで水勢を極端に弱めることができるのである。単に河原が存在するだけでは霞堤は意味がない。急傾斜であることが効果を大きくするのである。

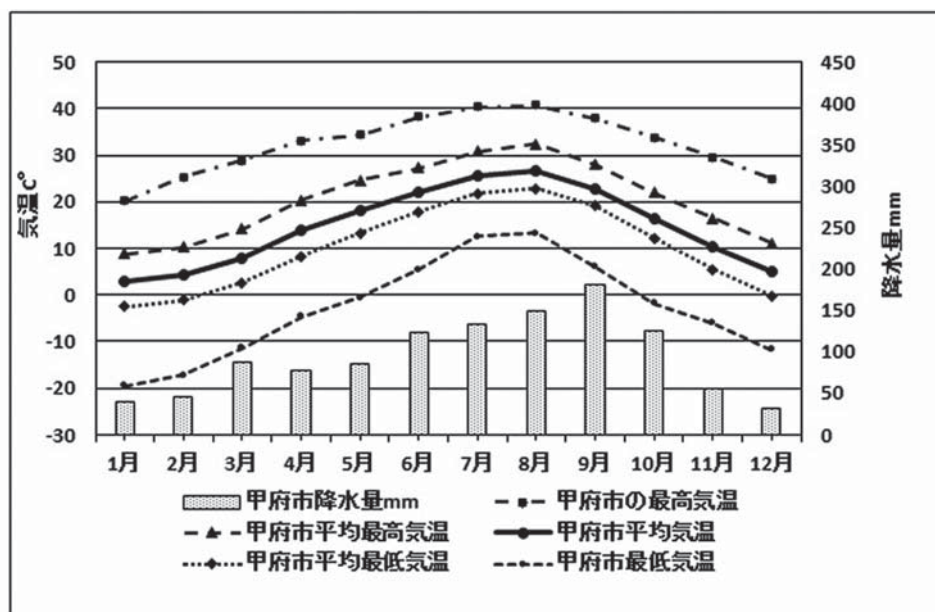
甲府盆地は、降雪こそ少ないものの冬の最低気温は上杉、今川、織田の領国と比べてはるかに厳しい。また 1 年を通して降水量がかなり少なく、河川は急流なため、田植え時期などに灌漑用水に困窮する可能性がある。上杉はもちろん、武田の領国も既に太平洋側の地域では一般化していたコメ、ムギ、ソバの二毛作や三毛作は不可能であったと考えられる（第 9 図）。



第8図 霞堤

さらに、武田の主たる領地である甲府盆地は、北からは八ヶ岳火山の葎崎岩屑流（七里ヶ岩台地）、その二次堆積物、さらに釜無川扇状地帯の礫が厚く堆積している。他方、東から流下する笛吹川の流域には扇状地帯の礫が堆積し、その上を富士山の火山噴出物起源のクロボク土壌が被覆している。農作物を栽培するためにはクロボク土壌はリンが不足しやすい特徴がある。このような点を考えると、気候がより寒冷化していた時期には、武田信玄は周辺の領国へ攻め入って食糧などを確保する必要に迫られていたであろうと考えられる。外山秀一³²⁾によれば、甲府盆地のクロボク土壌には、ササ起源の有機物やプラントオパールが含まれているという。

ところで、甲斐の武田といえば騎馬隊は歴史上名高い。しかし、その馬は競馬やテレビドラマで観る様なサラブレッドやアラブではなく、日本在来の木曽馬に代表されるような小型種であった。体高 130cm、体重 350kg の馬を使い、鎧、冑、鞍の重量として 45kg と、体重 50kg の人間の合計 95kg を乗せて走らせた実験がある³³⁾。その時、馬は普通の駈歩の半分にも満たない分速 150m（時速 9km）でしか走れなかった。しかも、それは 10 分間も続かなかったのである。すなわち、小型種の馬がまがりなりにも走れたのは距離にしたら 1500m 以下ということになる。現在、古戦場の桶狭間近くにある中京競馬場は、1 周 1530m の距離あり、ゴール寸前の直線に 1.4% の登り勾配が設けられている（ダートコース）。サラブレッドでも、まだ成長過程にある 2 歳牝馬戦の場合には、最後の登りで息切れする馬が多く、順位に大波乱がおきることがしばしばある。このことから前の実験結果は的外れなものでないことが首肯できる。



第9図 甲府市の気候 (1981～2010年)

また、馬という動物は、一般に音に敏感で、火縄銃の発射音などの大音響を耳にした場合、驚いて騎乗者を振り落とすことがある。さらに、馬は体重の多くを前足にかけるため、坂を下るのが苦手であり、下り坂ではスピードを出せない。これらのことを考えると、馬を使った場合、戦い方は意外に限定的であったとみなされねばならない。

中央畜産会³⁴⁾によれば、天正19年(1591)にイエズス会宣教師が、アラビア馬を献上した記録がある。また、将軍吉宗が馬の改良目的で、オランダから洋種馬28頭を取り寄せた。しかし文久3年(1863)ナポレオン三世より徳川家茂に牝馬7頭が贈与されるまで、日本人はサラブレッドを知らなかった。日本の在来馬は、木曾馬に代表されるような小型種であったらしい。

V. 中世戦国大名の完成

後の今川義元は、永正16年(1519)、駿河・遠江2国の守護であった今川氏親の五男として生まれた。太原崇孚^{すうふ}雪斎を教育係として、僧となるべく京都の妙心寺などで修行をした。今川家は、足利家に相続人がなければ、三河の吉良が、そして次に駿河の今川家がこれを継ぐという名門であった。

北条早雲の援助を受け家督を相続した氏親は、独自に「検地」を行い、大永6年(1526)には、家法である「今川仮名目録」を作り領国支配を確立していた。その後、長男氏輝と次男彦五郎が天文5年(1536)同日に両名とも怪死し、その2ヵ月後に三男の玄広恵深との跡目相続の戦い(花倉の乱)で義元が勝利し家督を相続した。

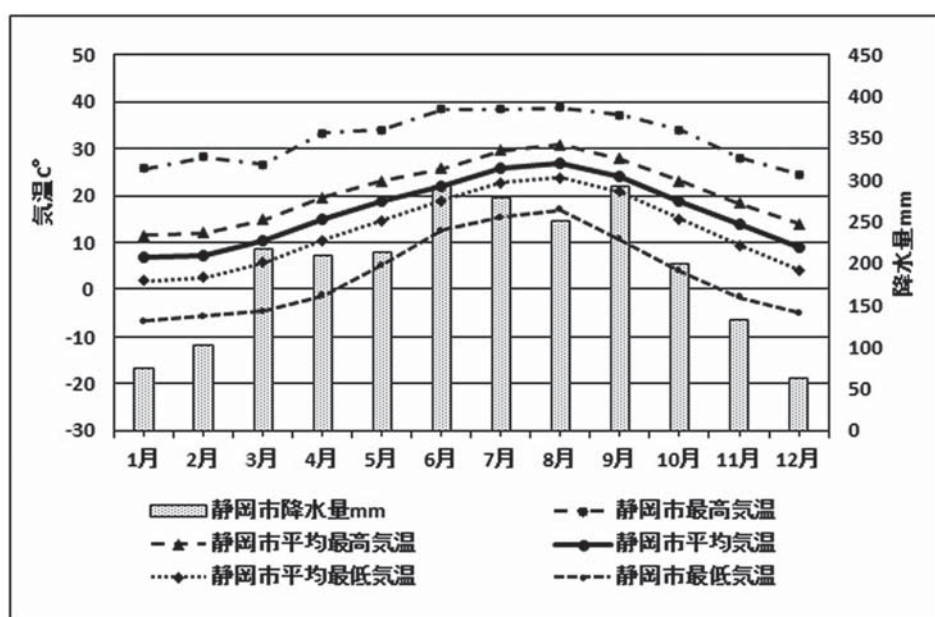
その5ヵ月後、隣国の三河から松平広忠(家康の父)が助けを求めて義元を訪れた。義元は、幼い広忠から岡崎城を奪い取った信定を大軍で包囲して退去させた。こうして、岡崎城は広忠の手に戻ったが、三河は実質的に義元のものとなった。

そして、天文5年(1536)、天文6年(1537)に始まる飢饉の年には武田と今川の間に甲駿同盟が成立している。世の中がめまぐるしく変化する中、天文8年(1539)から翌天文9年にかけても風水

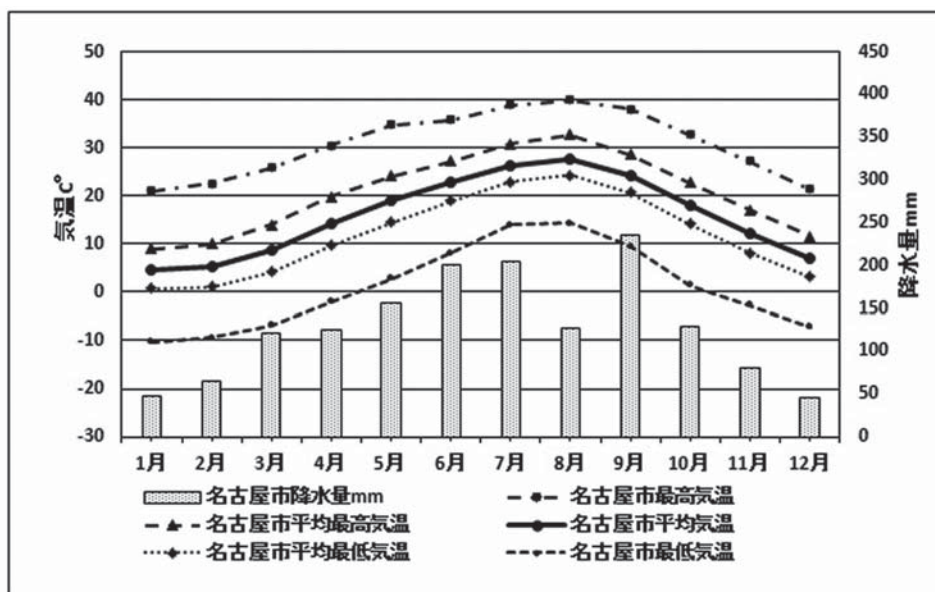
害、蝗害や戦乱で大飢饉が発生し死者は数十万人を数えた。

義元は、天文 22 年（1553）「今川仮名目録追加二十一条」を作り、足利幕府から独立した領国を支配し、海道一の弓取りと称されるようになっていった。それには、黒衣の宰相と呼ばれた太原崇孚雪斎の力が大きかったと思われる。また、義元は、京への修行の行き帰りに尾張や三河を観て、甲斐の武田と戦うよりは地味も豊かで気候も穏やかであり、津島や熱田を中心に経済的に繁栄していることを知っていた（第 10 図、第 11 図）。

そして、天文 23 年（1554）になると、太原崇孚雪斎の働きかけで甲相駿三国同盟が結ばれた。今川にとっては東の北条の脅威が無くなり、甲斐からの侵入も防げる点で、三河や尾張を視野に入れる点で好都合であったといえよう。また、武田と北条も共通の敵である上杉に備えることができるという画期的なものであった。この時、今川義元は中世戦国大名として完成したといえよう。



第 10 図 静岡市の気候（1981～2010 年）



第 11 図 名古屋市の気候（1981～2010 年）

VI. 信長の内憂外患

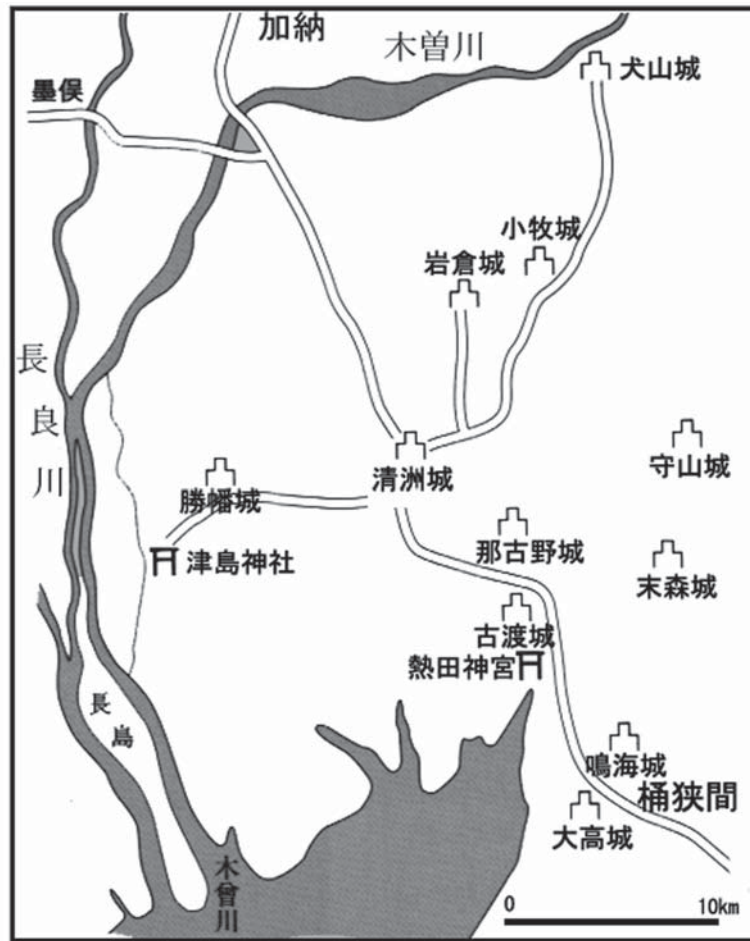
尾張では、天文元年（1532）に、信長の父で勝幡城主であった織田信秀は連歌の会に参加し、計略により今川氏豊を追放して那古野城を奪った。当時、尾張八郡には名前だけとはいえ守護の斯波義統しばよしがおり、上四郡を守護又代岩倉織田家の伊勢守信安とその子信賢が治めていた。他方、下四郡には清洲織田家の大和守信友と家老坂井大膳がいて、織田信秀はその配下の3奉行のうちの1人に過ぎなかった。しかし、信秀の父信定は、伊勢湾の重要な港である津島や全国に末社3000を持つ津島神社をその支配下においていた。また、信秀は熱田の豪商加藤にも経済的援助を受けるようになっていた。

さて、14世紀後半からは多くなった飢饉が、織田信長生誕前後には頻発するようになっていた。吉法師（信長）は織田信秀の嫡男として天文3年（1534）に勝幡城（現愛西市勝幡町・稲沢市平和町）か那古野城（現名古屋市中区）で生まれた³⁵。そして天文4年（1535）に信秀は熱田段丘面の東南方を固めるため築いた古渡城（現名古屋市中区）へ、幼い信長を那古野城に残し移って行った。また、晩年には末森城（現名古屋市千種区）へ移った。信秀の特徴のひとつは、居城をしばしば替えていることである（第12図）。後述するように信長も居城を次々に替える点で、兵農分離されていない兵を持ち土着性の極めて高い守護の流れを組む戦国大名と異なっている。

天文8年（1539）にも飢饉が発生し、翌年天文9年（1540）になると本格化した。この時、信秀は、三河安祥城（現安城市）攻めを行っており、6月には安祥城を攻め落とし、信秀の庶子信広を城主としておいた。また、この年には、多額の伊勢神宮外宮造営費用を負担することで、朝廷から三河守に任じられた。他の領土を攻めるには大義名分が必要であり、朝廷や天皇はそのために利用されていた。当時、三河は今川義元の支配下にあり、尾張との領土争いは様々な形で始まった。天文11年（1542）には、信秀は今川義元と第1次小豆坂の戦い（現岡崎市）に突入し、これにも勝利した。ところが、義元は天文15年に織田の支城である三河今橋城（現豊橋市）を奪取し、翌16年には渥美半島の付根に位置する支城田原城（現田原市）を落とした。そして、信秀に操られ松平忠倫が同族の松平広忠の岡崎城を攻めた。そこで、広忠は義元に救援を求めた。義元は救援の見返りとして広忠の嫡子竹千代（後の徳川家康）を人質として要求した。広忠はこれをやむなしとしたものの、妻の真喜姫の父である田原城主戸田康光は銭1千貫文で竹千代を織田信秀に渡した。

他方、信秀の勢いもここまでであった。追放された美濃国守護であった土岐頼芸と きよしなりを保護し、天文16年（1547）に斉藤道三に戦いを挑むものの、加納口の戦いで大敗した。そして、天文17年（1548）には拠点を末森城に移した。また、第2次小豆坂の戦いで今川に敗北。信長の庶兄である信広を人質にとられてしまった。また、尾張内部でも、天文17年には清洲の織田信友が末森城を攻めた。さらに天文18年（1549）になると、犬山城主織田信清が今川義元と手を結び信秀に叛旗を翻す「犬山の乱」が起きた。また、この年、信広と松平竹千代（徳川家康）との人質交換が行われた。信秀は天文20年（1551）に末森城で病死するものの、墓所である万松寺の位牌、過去帳などと発給文書の署名年月日で死亡時期は一致していない。「大うつけ」とされた信長への家督相続がスムーズに行かなかったためと想像される。

家督は信長に譲られることになっていたというものの、その実態は極めて危ういものであった。信秀の葬儀の席でも、信長の「大うつけ」ぶりは発揮された。天文21年（1552）には鳴海城主山口教継やまぐちのりよし、教吉親子が謀反をおこし今川方に寝返った。また、清洲城の信友が信長に敵対した。家督を継



第 12 図 濃尾平野の城

いだ時、信長は、まさに内患外憂の状態であったといえる。天文 22 年（1553）閏 1 月には、守役の平手政秀が、信長の行状を諫めるべく自刃している。

さて、天文 17 年（1548）に信長は、信秀の時に敵対していた齊藤道三の娘の^{きちよう}帰蝶と、和睦のために婚姻し、翌年結婚した。そして、天文 22 年（1553）4 月に、信長は舅の齊藤道三に請われて美濃との国境に近い富田（現一宮市）の正（聖）徳寺で会見する。この時、津島の 15 家筆頭の堀田道空が二人の間を取り持っている。道三が隠れ観ていると、街を歩く時、信長は、いつものように「大うつけ」の姿をしていた。そして 7～800 人のお供に柄 3 間半（約 6.4m）の長い朱槍 500 本、弓・鉄砲 500 挺を持たせ、元気な足輕を行列の前に走らせた。既にこの時、信長は長槍や鉄砲を武器に選び、足輕を戦闘員として重視していた。信長は青年期から馬術、水泳、弓、鉄砲を練習するだけでなく、津島を中心に次男三男を集めて竹槍合戦をし、長槍の有効性を確認したり、常設軍の訓練をしたりしていた。また、鉄砲は近江の国友に注文していたのである。ところが、会見の場に信長は髪を折り曲げに結い、長袴と小刀という正装で現れた。無事、会見を終えたあと、道三は「息子どもは、信長の門前に馬をつなぐ家来となろう。」と、信長の将来を予見して不機嫌であったと記録されている。美濃を支配している道三は、油売りから成り上がった典型的な戦国大名であった。それだけに、人物を見極める目を持っていたのであろう。天文 23 年（1554）今川に緒川城を攻められた信長は、齊藤道三に救援を依頼しなければ、今川方の村木城を攻めることができなかった。それほど、当時の尾張国内は政情が不安定であった。また、嵐の中船をだして村木城を攻めた様子を聞いて

た道三は「恐るべき男だ。隣国にはいて欲しくない。」と信長を評している。さらに、弘治2年、長男義龍が弟二人を謀殺し父道三に刃向かった時、道三は美濃国を娘婿の信長に譲るとした遺言状を残している。身内すら信用できないこの時代、道三と信長の間には血を越えた信頼関係があった。

しかし、信長と道三の娘帰蝶（濃姫）との間に子はできず、信忠、信雄、徳姫の母といわれる生駒家の類（吉乃）ほか多くの側室がいた。前野（吉田）家に伝わる『武功夜話』³⁶⁾によれば、信忠などの母となる吉乃は、丹羽郡小折村（現江南市）の生まれで、尾張はいうに及ばず、飛騨・美濃・三河・伊勢・駿河方面にまで灰（肥料や染料）や油を商う大豪商であったという。伊勢湾交易の拠点津島湊の権益を背景に信長の父信秀を支えた尾張下四郡の堀田家、熱田の加藤家などとともに織田家の経済的スポンサーであった。また、生駒家には出入りする様々な人たちからの情報があつた。後に豊臣秀吉の配下で活躍する前野将右衛門長康などが出入りしていた。その中には、馬借などの運送業や川並衆の棟梁として蜂須賀小六もいた。藤吉郎（秀吉）も生駒家に出入りして信長の配下になれる機会を得たという。

さて、天文12年（1543）に種子島に流れ着いた倭寇の船に、乗っていたポルトガル人が伝えた鉄砲は、和泉の堺、紀伊の根来・雑賀、近江の国友などで量産されていた。信長はいち早くそれに目をつけており、16、17、18歳頃には橋本一巴を師匠として鉄砲の稽古をしていた。また、天文23年（1554）の村木城攻めの時に、信長軍は鉄砲を取り替えながら使った記録がある。鉄砲は単に模倣して作ればいいというものではない。玉や火薬ももちろんなければならなかったし、使用方法に習熟する必要があつた。特に、火薬に使う硝石は、当時は中国などからの輸入に頼らざるを得なかったはずであり、戦さに鉄砲を使用するのは、決して容易ではなかったと考えられる。後の永禄11年（1568）に、足利義昭の要請で上洛し、義昭を15代将軍につけた時にも、信長は副将軍や管領の職につくことを固辞し、貿易港の和泉国堺、近江国大津、草津に代官を置く権利を手に入れている。瀬戸内海航路の終点である堺を押さえてしまえば、これより東の地域に領国を持つ戦国大名たちは硝石を手に入れることができない。そうすれば、鉄砲を作ることはまねできても、大量に火薬を作ることは不可能であり、戦さに鉄砲を大量投入することはできない。祖父や父の代から流通システムを掌握することに力を注いだ信長だからこそできることであつた。信長が旗や幟の印として「織田木瓜」と「永楽銭」（岐阜城移転以降）を用いたことはよく知られているが、ここで用いられた永楽銭はまさに信長の支配システムとしてお金に注目していたことが判る。

さて、家督を継いだ信長がまず戦わねばならなかったのは織田家の同族であつた。また、表1に示したように、それぞれはおおよそ14～15km離れた距離にあつた。信長が足しげく通つたといわれる生駒屋敷まで、清洲城から14km、那古野城から17km。馬で片道3～4時間あまりの距離であつた。よほどの急用でもない限り、信長は生駒屋敷で一夜を過ごしたと推定される。

さて、天文21年（1552）に守山城主織田信光の援助を受けて、清洲城主織田信友らと戦い深田城・松葉城を奪取。天文22年（1553）に尾張下四郡守護代信友と家宰坂井大膳が守護斯波義統殺害。義統の子岩龍丸（義銀）^{よしかね}が信長の許に身を寄せる。天文24年（1555）に信光と共謀して清洲城（現清須市）を乗っ取り、守護代信友を自害させる。そして、信光も暗殺され、ここでようやく尾張下四郡（海東・海西・愛智・智多）を掌握した。弘治2年（1556）齊藤道三が子の義興に討たれ敗死。同年、兄信長と違い品行方正であつた弟の信勝（信行）が家老の林秀貞・柴田勝家らに擁立されて謀反。^{いのう}稲生の戦いで信長に敗北。信勝は母の土田御前を頼って助命されるが、再度謀反を起こす。それを柴田勝家の内報で知った信長は、弘治3年（1557）に清洲城内で実の弟である信勝を殺害した。永禄元年

表1 織田信長居城などの距離

	清洲城	勝幡城	津島神社	那古野城	古渡城	守山城	熱田神宮	桶狭間	岩倉城	生駒屋敷	小牧城	犬山城	大高城	末盛城	岐阜城
清洲城	0	10	14	8	9.8	13	15	24	9	14	13	23	20	13	27
勝幡城		0	4.7	15	16	22	19	30	18	20	22	31	27	21	30
津島神社			0	18	18	26	21	31	21	24	26	34	28	23	32
那古野城				0	3.3	9	7	17	13	17	13	25	15	6.6	33
古渡城					0	11	4	15	17	20	16	28	4.1	6.4	36
守山城						0	14	19	14	17	13	22	18	6.2	36
熱田神宮							0	11	19	24	20	31	8	7.9	39
桶狭間								0	29	34	30	40	4.6	14	50
岩倉城									0	4.6	5	14	27	19	23
生駒屋敷										0	5.7	11	31	21	20
小牧城											0	12	27	16	25
犬山城												0	38	27	20
大高城													0	9.2	33
末盛城														0	40
岐阜城															0

(1558) には、尾張上四郡（丹羽・葉栗・中島・春日井）を支配していた岩倉織田家で内紛が発生。守護代信安は追放された。そして、信長は父を追放した信賢^{のぶかた}と浮野で戦う。また、この年、信長は上洛して將軍義輝に謁見している。そして、翌年、岩倉城を攻略してほぼ尾張を平定した。残る敵は犬山城主信清であった。

VII. 梅雨と桶狭間の戦い

今川義元は東の後北条、北の武田と天文23年（1554）甲相駿三国同盟を結び、留守中の心配を無くした。また、義元は永禄元年（1558）に家督を長男氏真に譲り尾張に侵攻することになった。

先発隊は永禄3年5月10日（1560年6月3日）に駿府を発ち、義元本隊は12日に出発し約45000人（約25000人など諸説ある³⁷⁾）の軍勢を引き連れて東海道を西に向かった。かつて、その目的は上洛し、足利將軍家を補佐して天下に号令を発することと考えられていた。しかし、兵農分離していない兵は、長期間にわたって地元から離すことができず長期の京都駐留は難しい。また、大軍を率いた上洛では、尾張以外にも多くの敵がおりそれらを破らねばならない。上洛に先立った調整は行われていない。次に、肥沃な広大な土地のある尾張を支配下に置くことが目的であったとする見方がある。しかしそれならば、信長が尾張をほぼ平定することを待っている必要はなかったであろうと考えられる。織田が同族同士でつぶしあっている時こそ、すでに支配権を確立していた今川義元にとって尾張の領土を切り取るのに好都合であったはずである。第三に、知多半島の持つ伊勢湾交易権を手に入れるというためという考え方がある。しかし、京都で出土した常滑焼などの中世土器を検討した鋤柄俊夫³⁸⁾によれば、常滑焼が京都に入ってきたのは14世紀半ばまでであり、信長や義元の時代には丹波焼や備前焼が中心になっており、常滑焼はほとんど出てこない。このことから、武田知弘³⁹⁾の常滑焼利権を含めた知多半島戦争と位置づけた考えは支持できない。また、伊勢湾交易は伊勢大湊、桑名、津島、熱田などの湊のネットワークが重要であり、知多半島の野間や常滑だけを押さえても意味はない。義元は三河今橋城や三河田原城、安祥城など一度は織田信秀の手に落ちた城を取り戻しており、また徳川家康の岡崎城も支配下に入れており、義元は実質的に三河と三河湾をほぼ手中にしていた。

当時、今川義元はすでに42歳、織田信長が27歳という年齢のことを考えると、なぜこの時期になって義元が尾張侵攻を決断したか判りにくい。義元が駿河、遠河で活躍する場には、太原崇孚雪斎が常に傍にいた。しかし、太原崇孚雪斎は弘治元年（1555）に死亡しており、義元には軍師がいな

くなっていた。そして、義元は、その直後、収拾のつかなくなっていた上杉と武田の第2次川中島の戦いの調停に大軍を動員して両者を和睦させている。この時、信長はまだ尾張下四郡をようやく掌握したばかりであり義元にとっては、尾張に侵攻の絶好の機会であったのに、上杉・武田の調停を行っていて時期を逸したと考えられる。斉藤道三が義龍に討たれた弘治2年（1956）も、義元にとって尾張侵攻の良い機会であった、しかし義元はこれも見逃している。

さて、次にここで考えておきたいのは、義元出陣の季節は、現在で言う梅雨の真只中であった。今川義元軍はなぜこの気候のよくない時期に大軍を率いて移動したのであろうかということである。そこで考えられるのが、今川義元は海道一の弓取りと言われる名将ではあっても、彼の領国支配の有様は、先に述べた中世的兵農未分離の状態であったことである。すなわち、農民でもある今川義元軍は農繁期の田植えが終了してからしか兵として用をなさなかったと考えられる。駿河国は後背に富士山や赤石山脈など3000m級の山々が控えており、降水量も多い。したがって水田を潤す水には恵まれているものの、雪解けの水は水温が低い。さらに富士川、安部川、大井川、天竜川などの河川が形成する平野では、本流性の扇状地帯を上流側から田植えをしていくとすると下流までに相当の時間がかかると思われる。また、梅雨の時期にはこれらの大河は増水しており、河川に橋がかけていないこともあり渡河は容易でなかった。おそらく河川を渡るには、船か舟橋が利用された。あるいは徒渉ということも考えられる。

今川家は、足利将軍家、吉良家（斯波家）に次ぐ家格を持つ一族であった。駿府の今川館から桶狭間まで約158kmある。これを徒歩で移動するだけなら5日間もあれば余裕である。しかし、義元軍は8日を要している。駿河出発時に落馬したこともあり、義元は輿に乗って移動していたらしい。輿は神や天皇の公式行事の場合には肩に担がれる。しかし、義元の場合は手で腰の位置に支えられており、移動速度は速いとはいえなかったと思われる。今川館を出て、12日は安部川を渡り藤枝泊（約19km）。13日は大井川を越え掛川城泊（約31km）、14日は天竜川を渡り引馬城泊（約27km）。15日は浜名湖を越え吉田城泊（約37km）、16日は豊川を渡り岡崎城泊（約32km）。ここまではほぼ義元が安心して移動できた地域であった。ところが17日になると移動速度が激減する。17日には知立（池^{ちゅう}鯉^{りゅう}城）（約12km）を経て、沓掛城に陣を張る（約9.8km）。18日夜、松平元康（家康）は大高城（約10km）に兵糧搬入に成功した。そして19日未明、義元軍の先鋒が、織田方鷲津砦と丸根砦攻撃にかかるも信長からの援軍はなく両砦とも陥落した。

ところで、当時、武器や武具食糧は兵の自前が常識であった。仮に義元軍が45000人の軍勢であったとすると、水や食事の準備は決して容易ではなかった。 $3\text{合} \times 45000\text{人} = 135000\text{合}$ 、 $135\text{石} \times 8\text{日} = 1080\text{石}$ 重さにして約129600kgが必要であったと考えられる。

また、仮に兵45000人を道幅5間（約9m）に、8人で隊列を組むと考えた場合、先頭から末尾まで5625列。前後の間隔を約1m確保した場合、隊列の長さはおおよそ5625mとなる。地球の半径を約6400kmとし、視点の高さを1.5mとした場合、地形の起伏がなく視野が極めて良好としても、見ることのできる距離は約4.4kmであり、義元軍は最後尾どころか、先頭から約78%の位置ですら先頭で何が起きているか見えないことになる。地形に起伏があり、最前列と最後尾との比高がある場合で、最後尾は最前列の状態をみるのが理論上可能になる。もちろん天候が悪かったり視界を遮るものが存在したりすれば、その距離はさらに短くなる。当時の馬の平均体長は130cmで馬に乗った場合、武者の座高を80cmとして目の高さは地上から約2m。視点の高さを約2mとして見渡せる範囲は約5km。それでも、最後尾から最前列で何が起きているか見極めることは難しい。輿の場合、

地面から 75cm として、輿に乗った義元の座高が 80cm、視点 70cm とした場合、視界は約 4.2km 程度である。軍勢が少ない場合でも、横に並ぶことのできる人数が限られれば、隊列はとめどなく長くなる。また、普段訓練を受けていない農民兵の場合、統制が利きにくいといわざるを得ない。彼らの目的は戦いに勝利した時の略奪にあり、敵から攻撃を受けた場合、我先に逃げ出すのは常識であった。

一般に守護の流れをくむ今川義元のような大名の支配は、譜代・一族（寄親）、国人がおり、その下にそれぞれの家臣や足輕（寄子）がいた。譜代・一族、国人などは戦いに勝てば知行地が与えられたが、家臣や足輕は戦勝後の略奪が重要な利益となった。絶対的な主従関係ではなく、部下は戦いに負ければ何も得られないため、様子を観て寝返ることもしばしばであった。

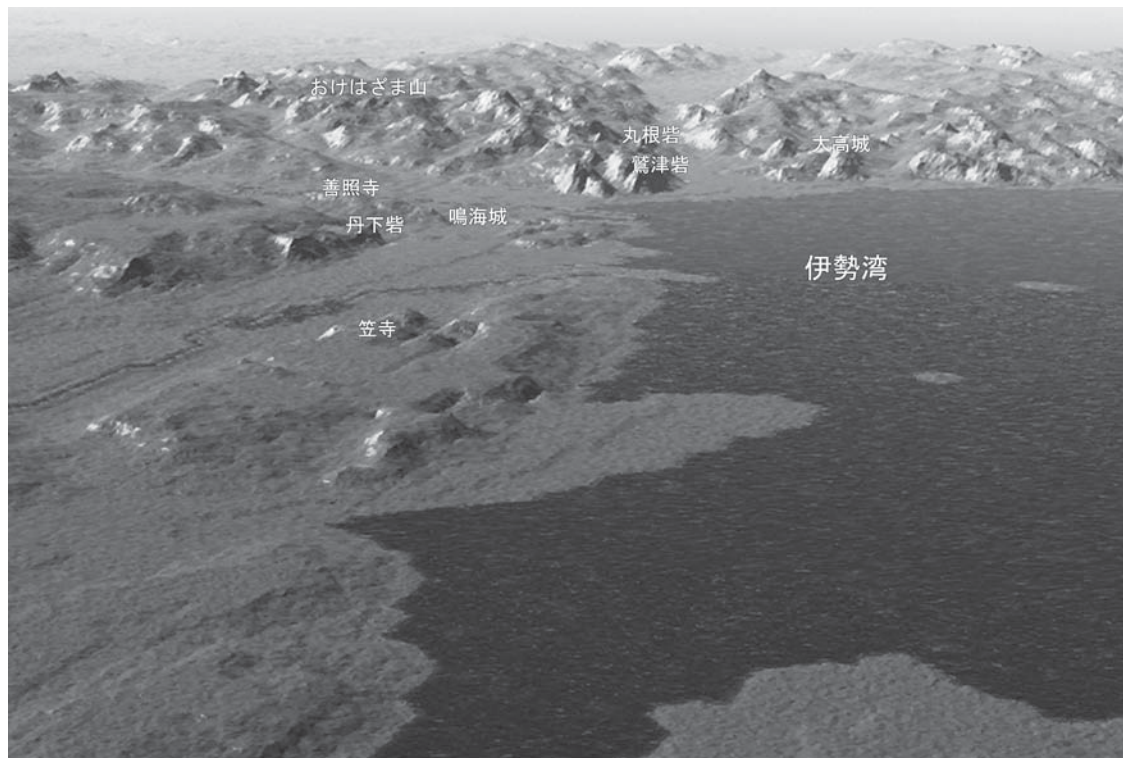
さて、義元軍の 45000 人が野営する場合に、ひとりに必要な面積を $1\text{m} \times 2\text{m}$ とすると、 90000m^2 の広さが必要である。すなわち、 $300\text{m} \times 300\text{m}$ の土地がなければならない。時期的に梅雨期であることを考慮すれば、駿府今川館を出発以来、7 晩の間、雨が降らなかったとは考えられない。ちなみに、京都は 11 日、12 日、19 日が雨であったとの記録がある⁴⁰⁾。どうやって雨をしのぐかは、兵の健康状態や戦闘意欲に関わる重要な問題である。たとえば 18 日の夜を過ごした沓掛城は東西 $288\text{m} \times$ 南北 $234\text{m} = 67392\text{m}^2$ しかない。もちろん、同時に全員が眠っている訳ではないが、かなり窮屈であることは間違いない。しかも風雨を凌げる建物の中に居られたのは、ごく一部に限られた。

5 月 19 日の桶狭間の戦い当日、昼頃の雷をともなった激しい雨が降った時、45000 人が密集していたとしたとしても、約 212m 四方の土地が必要であった。すなわち、現在の豊明市栄町南館にある国指定桶狭間古戦場伝説地から名古屋市緑区桶狭間公園までは、ほぼ人で満ち溢れていたことになる。

さて、織田信長軍が駿河の今川義元軍と尾張国桶狭間であいまみえたのは永禄 3 年 5 月 19 日（1560 年 6 月 12 日）である。義元軍が尾張に侵入しようとしていた時、信長は清洲城にいた。信長は、義元が既に支配を確立していたのに、ようやく尾張をほぼ平定したばかりであった。そして、義元方についた大高城と鳴海城にそれぞれ対抗する砦を作っていた。今川方の大高城（鵜殿長照ほか約 2000 人）に対しては織田方の丸根砦（佐久間盛重ほか約 400 人）と鷲津砦（織田秀敏ほか約 520 人）が備えていた。また、今川方鳴海城（岡部元信ほか約 800 人）に対しては、織田方の丹下砦（水野忠光ほか約 340 人）、善照寺砦（佐久間信盛ほか約 450 人）、中島砦（梶川重美ほか約 250 人）が鎌倉往還や東海道を遮るように位置していた（第 13 図）。

18 日夕刻には丸根砦の佐久間盛重や鷲津砦にいる織田秀敏から、夜になれば今川軍の攻撃が始まるだろうとの報告が信長にもたらされた。しかし、清洲城の信長は、家老たちが丸根砦や鷲津砦に後詰めに行くべきであるとか、清洲城か勝幡城に籠城すべきとの考えを持っているのを知りながら、作戦については一切触れず世間話に終始し、夜が更けてから散会を言い渡した。味方と思われる者でも、何時、寝首をかかれるか判らない時代である。味方を欺くことは、敵を欺くための前提条件であったといえよう。実際の戦いの前に、すでに調略や情報戦は始まっているのである。信長の「大うつけ」作戦しかり。龍興の弟殺し、それを真似たと思われる信長の実弟信勝の粛清しかりである。また同族の争いの中で、信長は調略や情報戦を制したものが勝者となりうることを、身を持って学んでいたはずである。

籠城という一見消極的にみえる専守防衛の作戦は、中世兵農未分離段階において、攻める側が長期戦になれば兵力を維持できないという弱みがある場合には有効であったといえよう。兵としての専門の訓練を受けていない農民が参戦している場合、緊張感が維持できず、略奪などに走ることが



第 13 図 熱田神宮上空からみた桶狭間

考えられる。しかも食糧の補給を考えても容易ではない。また、農繁期になれば、このような者たちは領国に帰ると言い出すに違いない。1 年中、戦に明け暮れていては、食糧生産がおぼつかなくなるのである。

現在、桶狭間の合戦が行われた場所として、名古屋市緑区桶狭間公園と豊明市栄町桶狭間古戦場とがある。現在は、行政区からまるで別個のところであるかのように思われがちであるが、実際には第二瀬戸内海に堆積した東海層群から構成される丘陵のやせ尾根を挟み隣接した谷地形である。この丘陵を刻む谷は、東海地方では「狭間」ないし「洞」と呼ばれる。この地形は「常陸国風土記」に「谷地」ないし「谷津」と同じである。ここは丘陵を刻む無従谷であり、河川が粗粒な堆積物を運んでこないため湿田や沼として利用されることが多い。水田とした場合、コメの土地生産力は地下水の低い乾田に比較し半分の 4～5 俵 / 反くらいしか収穫が見込めず、ムギやソバなどの裏作も不可能である。しかも、牛馬耕や機械耕もむづかしい場所である。しかし、旱魃の際にも常に一定量のコメが収穫できることから、翌年の種籾を作る場所として重宝されてきた。

他方、丘陵は海成や淡水成の粘土や砂礫層からなる。この粘土は土器の原料として先史時代から利用されてきた。特に淡水成粘土は 1100℃ の高温にも耐えるため、古墳時代以降、須恵器や常滑焼などの生産に用いられてきた。また、丘陵の潜在植生は、カシ、シイ、クスノキなどの常緑広葉樹であるが、窯業や日々の生活の燃料として伐採されてしまい、禿山状になっていたり、アカマツ、ツツジなどの二次林が生えたりする里山であった。おそらく、近畿地方の大阪層群で構成される丘陵と同様に、常滑焼や瀬戸焼の燃料として伐採されてしまい、桶狭間の合戦があった 16 世紀には禿山に近いアカマツの疎林であったと思われる。現在、この丘陵は比較的安い土地として住宅地として利用されるが、大正時代の写真には、16 世紀に近い状況が写っている。また、この丘陵は全体的にとらえると標高 65m ～ 45m と、南東がやや高く北西が低い定高性がある。

おそらく、5月19日午の刻（正午前後）に、義元が休息をとるために北西に向けて陣を張った「おけはざま山」は、織田方の善照寺砦や中島砦を一望できる場所であったと考えられる（第14図）。しかも人馬に休息を与えたという点からすれば、そこに至る道筋は緩傾斜であったに違いない。馬は、牛と比べて斜面を苦手としているし、義元が8人で運ぶ朱塗りの輿に乗っていたとすれば、急斜面は登れない。また、突然の激しい北西方向から降る雨に見舞われて、義元はそれを避けるべく見晴らしのよいピークから北西からの風雨を遮ることのできるやや低い場所に移動した可能性が高い。

さて、18日の夜半に重臣たちにも本心を告げず作戦会議を散会した信長は、19日の夜明け頃、鷺津砦、丸根砦から今川軍からの攻撃を受けているとの報告を受けた。そこで、信長は幸若舞の「敦盛」を舞った後、大急ぎで出陣の容易をして、食事を摂り出陣した。その時、付随ったのはお小姓衆5人。この日、月の入時間は午前3時40分頃、そして日の出時間はおよそ午前4時46分である。清洲から熱田まで一気にかけ抜けたと『信長公記』には記されているが、馬の状況からすればせいぜい時速4～6km程度であると考えられる。その距離約13kmである。

熱田神宮で勝利の祈願をし、午前8時頃に上知我麻神社の前で鷺津・丸根砦が落ちた煙をみる。この時、信長を含めて騎馬6騎雑兵200人あまりであった。騎馬の速度に雑兵がついて来ることができず速度で移動していると考えられる。そして、笠寺段丘面を東に横切り、古鳴海から丘陵に沿って南下し、丹下城に入った。当時、笠寺段丘面の西側はすぐ海となっており、星崎から南へは砂堆が伸びていた。また、黒末川と呼ばれていた天白川は、エスチュアリーのような状態であった。古鳴海から丹下城へ至る時、少なくとも義元本隊は、一時的に信長を見失っていた可能性がある。また、善照寺砦への移動も義元本隊からはみえてはいなかったと思われる。熱田神宮からここまで約9km。善照寺砦で一息入れ、体制を整える必要があった。

そして、中島砦に向かおうとした時、信長軍は2000人足らず。中島砦から信長軍は、急に降り出した北西からの激しい風雨を背にして丘陵の谷を進んだ。現在、名鉄本線が通っているこの谷は、活断層に影響されて北西－南東方向を向いている。この時も義元本隊は信長軍の動きを見失っていた



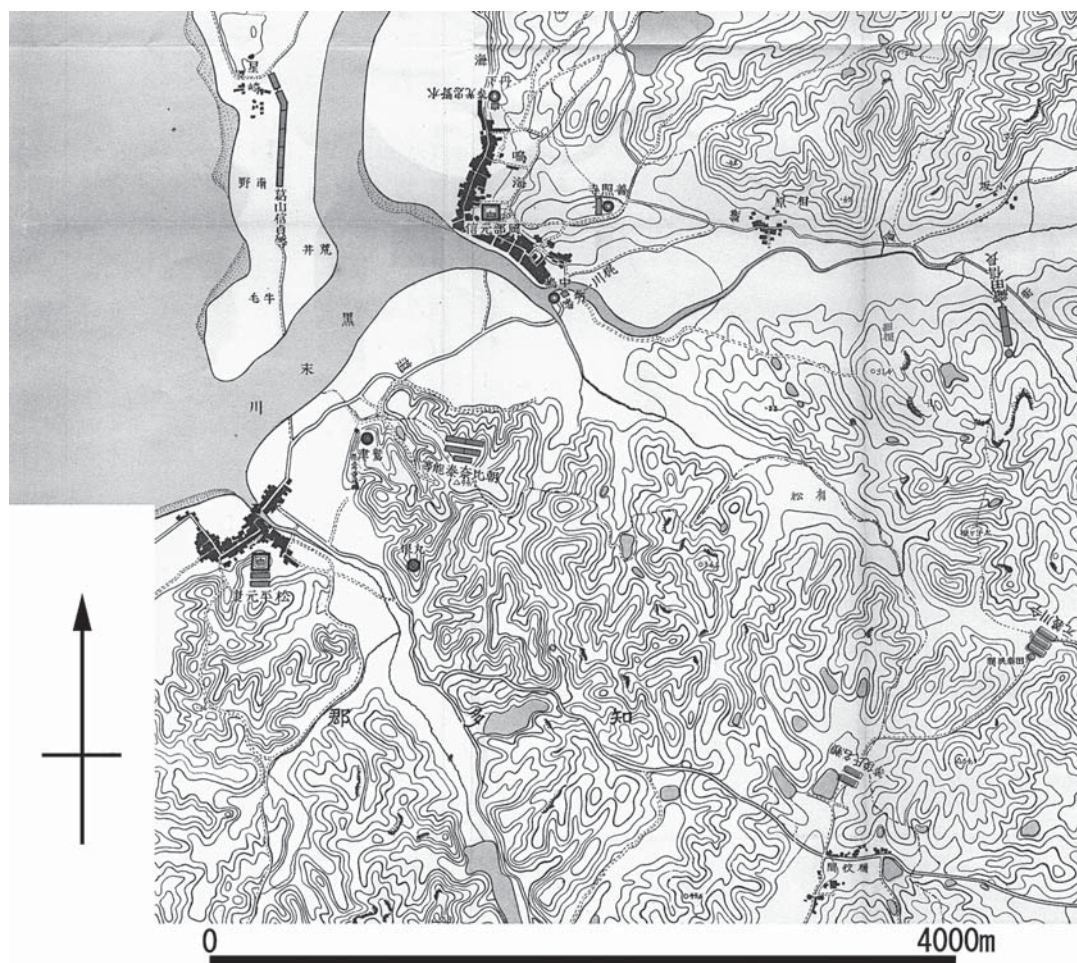
第14図 今川義元本陣からの展望

と考えられる。

「おけはざま山」付近はおそらく植生がほとんどなかった。北西から雷をともない降り注ぐ風雨を避けて、義元本隊は、北東－南西に延びる丘陵の風下に少し移動し、南東に顔を向けていた可能性が高い。いいかえれば、北西方向から進軍してくる信長軍に顔を背け、背中をみせていたと考えられる。雷をともなった強い風雨に見舞われた時、人は無意識にそれを避ける行動をとる。この強い風雨は、まさに信長に味方した。

旧日本陸軍参謀本部は、桶狭間の戦いをシミュレーションして、善照寺砦から丘陵を大きく東に回って、義元軍を奇襲することが、45000 人の義元軍に 2000 人足らずの信長軍が勝利するための作戦と考えた。信長軍奇襲説は、すでに江戸時代の小瀬甫庵の『信長記』に初めて観ることができる。しかし、小瀬甫庵は、桶狭間の戦いの時にまだ生まれてもいない。また、参謀本部の戦闘シミュレーション地図を復刻した日本戦史付図「桶狭間戦図」⁴¹⁾ (原図 1/20000) を観ると、少なくとも地図をきちんと読める人間が考えたとは思えない無理な奇襲ルートを考え、しかも、何度も必要のない遠回りを想定している (第 15 図)。これはどう考えても合理的でない。

信長軍は、結果的に義元本隊に気づかれることなく接近できた。そして、空が晴れた、信長の号令の下、義元本隊に攻撃を始めた。義元本隊の足軽たちは統制が利かなくなり、義元の乗っていた朱塗りの輿も討ち捨てて逃げ崩れた。未の刻頃、信長軍は東へ向かって攻め、最初、義元の周辺に約 300 騎いた旗本も何度も攻撃で約 50 騎となった。津島以来、信長の常備軍になった服部小平太



第 15 図 桶狭間戦図 参謀本部復刻

が義元に打ちかかり、毛利新介が義元の首を討ち取った。大将を討たれた義元本隊は、ただただ逃げ惑うばかりであった。そして、桶狭間の深い湿田に足を取られて次々に討ち取られていったという。また、海上に千艘ばかりの船を浮かべて義元に味方していたうぐい^{うぐい}ら（鯛浦^{ちりゅう}：現海部郡弥富町）の服部友定は格別の働きもなく引き上げた。義元軍は鳴海城、大高城、沓掛城、池鯉鮒城^{しぎはら}、鳴原城を明け渡して退去した。翌日、清洲城で首実検が終わると、信長は、生け捕りにした者に義元の首を持たせて駿河に送り返す。この時、10人の僧を付き添わせた。また、清洲城から約2km南には義元塚を築かせ供養した。少なくともこの時点では、信長は決して信仰がないわけでも宗教が嫌いというわけではない点に注目しておきたい。また、一番の恩賞を義元軍の状況を知らせた薬田政綱^{やなだ}であった点も信長の戦略を考える上で重要である。

VIII. 小結

1) 環境史からみると、戦国時代の始まりは「小氷期」の開始と期を一にする。15世紀後半～16世紀前半を中心に飢饉や土一揆は発生した。これは、8世紀～9世紀頃の飢饉が旱害であった点と異なる。また、土一揆に際し都市に集まった流民は、略奪をおぼえ足軽化していく。

2) 守護の流れをくむ上杉謙信、武田信玄、今川義元たちは、兵力として地域の土豪に頼っていた。これは普段は農民であり、兵農分離された存在ではなかった。そのために戦さや上洛の時期は農閑期に限られた。また、その主従関係は、絶対的なものではなく、条件次第で調略されたり造反されたりすることも珍しいものではなかった。また、土着性が強く、大名は拠点である城を容易には動かすことができなかった。さらに、治水や地域振興に力を入れて領民の支持を得なければ、領主たりえなかった。

3) 上杉謙信や武田信玄は冬季の積雪や、寒さのために裏作ができず、飢饉の際には他領へ侵攻することとなった。そして、戦いに勝って領土を切り取った場合、兵農分離していない土豪や足軽に略奪が褒美として許された。

4) 今川義元は検地や領国法を整備し、他に先駆けて足利幕府から独立し、中世的戦国大名として完成型となった。その背景には黒衣の宰相と呼ばれた太原崇孚雪斎の存在が大きかった。太原崇孚雪斎の死亡した以降の義元の行動には説明できないところが多々ある。尾張への侵攻時期は、まさに意味不明であった。

5) 織田信長は生まれる前から気候の寒冷化が起きていた。信長の家系は尾張下四郡守護代に仕える3人の家老の一人に過ぎなかった。しかし、津島の堀田家、熱田の加藤家、江南の生駒家などの経済力や情報収集力を背景とし力を伸ばした。その最初の敵は同族の織田一族であった。

6) 今川義元の尾張侵攻は、信長が尾張一国をほぼ掌握した時に起きた。信長軍は寡兵ながら、常備軍として訓練されていて、義元本隊のような兵農分離されていない兵とは異なっていた。また、情報戦の重要性を十分に知っていた信長は、味方にすら戦略を打ち明けず、桶狭間の戦いに臨んだ。そして、熟知した丘陵の谷地形（狭間）の特性を活かして、義元本隊から姿をくらすことに成功し、さらに北西方向からの雷をともなった風雨を味方につけて戦いに勝利した。

注

- 1) 高橋 学『平野の環境考古学』古今書院、2003、314 頁
- 2) 高橋 学「地形分析からみた弥生時代の環濠集落」、山田安彦教授退官記念論文集『転換期に立つ地域の科学』古今書院、1993
- 3) 寒川 旭『地震考古学』中央公論社、1992
- 4) 高橋 学「古代末以降における地形環境の変貌と土地開発」、日本史研究 380、33-49 頁
- 5) 宇野隆夫「井戸考」史林 65-5、1982、623-661 頁
- 6) 黒田日出男『日本中世開発史の研究』校倉書房、1984、502 頁
- 7) 戸田芳実『初期中世社会史の研究』東大出版会、1991、329 頁
- 8) 木村茂光『日本古代・中世畠作氏史の研究』校倉書房、1992、412 頁
- 9) 前掲 4)
- 10) 海老沢衷「豊後国田染荘の復原調査」、日本歴史 393、1981、86-93 頁
- 11) 高橋 学「高松平野の地形環境－弘福寺領山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に－」、高松市教育委員会編『讃岐国弘福寺領の調査』、1992、149-192 頁
- 12) 高橋 学「鶴荘絵図「弘山押領」の地形環境分析」、太子町教育委員会編『播磨国鶴荘現況調査総集編』、2004、209-226 頁
- 13) 橋本政良『環境歴史学の視座』岩田書院、2002、239 頁
橋本政良『環境歴史学の探求』岩田書院、2005、263 頁
- 14) 飯沼賢司『環境歴史学とはなにか』山川出版社、2004、102 頁
- 15) 井上 勲編『日本史の環境』吉川弘文館、2004、343 頁
- 16) 水野章二『中世の人と自然の関係史』吉川弘文館、2009、349 頁
- 17) 水島 司編『環境と歴史学』勉誠出版、2010、240 頁
- 18) 平川 南編『環境の日本史 1 日本史と環境－人と自然』吉川弘文館、2012、262 頁
- 19) 清水克行『大飢饉－室町社会を襲う』吉川弘文館、2008、215 頁
- 20) 北村優季『平安京の災害史』吉川弘文館、2012、198 頁
- 21) 高橋 学「環境変動と土地開発－条里型地割施行前と施行後」、条里制・古代都市研究 18、2002、1-43 頁、巻頭図版 3-13
- 22) 八賀 晋「古代における水田開発：その土壌的環境」、日本史研究会 96、1968、1-24 頁
- 23) 前掲 1)
- 24) 寺沢 薫ほか『田原本町史 本文編』田原本町、1986、9-133 頁
- 25) 田原本町教育委員会編『弥生の巨大遺跡と生活文化』雄山閣、1989、226 頁
- 26) 前掲 1)
- 27) 高橋 学「高雄のモミジと醍醐のサクラ－環境史から見た京都の観光－」、立命館大学地理学教室編『観光の地理学』文理閣、2015、150-167 頁
- 28) 阪口 豊「過去 8000 年の気候変化と人間の歴史」、専修人文論集 51、1993、79-113 頁
- 29) 北川浩之「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」、吉野正敏・安田喜憲編『歴史と気候』朝倉書店、1995、47-55 頁
- 30) 清水克行『大飢饉 室町社会を襲う』吉川弘文館、2008、215 頁
- 31) 高橋 学「古代荘園図と自然環境」、金田章裕ほか編『日本古代荘園図』東京大学出版会、115-128 頁
前掲 27)
- 32) 外山秀一氏の御教授による
- 33) <http://www.hidaka.pref.hokkaido.lg.jp/ts/tss/umabunka/04-shiru/01-ningen-history/01-nihon-history/01-denrai-kamakura/index.htm>
- 34) http://zookan.lin.gr.jp/kototen/uma/u323_2.htm
- 35) 信長の生涯を記録した史料として大田牛一『信長公記』が著名である。太田牛一は、信長生誕の 7 年前の大永 7 年（1527）に生まれ、信長や秀吉に武士として仕え、慶長 15 年（1610）年頃『信長公記』全 16 巻を記したらしい。ただし、この書は明治まで自筆本や写本で伝えられた。ここでは中川太古が 2013 年

に現代語訳した新人物文庫を参考にした。

太田牛一著・中川太古訳『現代語訳信長公記』新人物文庫、2013、1-106 頁

小瀬甫庵・神郡周校注『信長記（上下）』現代思潮新社、1981、上 227 頁、下 225 頁がある。これは、『信長公記』の内容に不満を持った小瀬甫庵（永禄 7 年：1564 年～寛永 17 年：1640 年）が記したものであるが、彼は池田恒興や豊臣秀次に仕えたことはあるものの信長に仕えたことはない。また、桶狭間の戦いは小瀬甫庵の生まれる 4 年前の（永禄 3 年：1560）であり、本能寺の変（天正 10 年：1582）の時ですら 18 歳であり、読み物としては面白いものの信頼性には乏しいといわれる。軍記物や家伝の特徴として、自己の正当性の強調や権威や権力におもねることや、判官贔屓になったりするのは防ぐことができないであろう。戦いの際、敵方の軍勢が多く書かれるなどのデフォルメはしばしばみられる。特に信長や秀吉のような人物やその関連した出来事については、様々なバイアスがかかっているものとみなされる。後に加賀藩に召抱えられて執筆をした小瀬甫庵や、前野（吉田）家の家伝である『武功夜話』などはもとより、一級史料と言われる『信長公記』ですら、太田牛一が信長の死後、秀吉関係者に召抱えられたり、同時代に生きていたゆえに事実を記せないこともあったであろうと思われる。しかも、信長の「大うつけ」のように敵だけでなく、味方をも欺く行為があった可能性が否定できない。また、將軍義昭の書状のように、自分は事実と考えていても、結果は虚偽であることも存在するであろう。信長が尾張を支配下に置こうとした段階で、実弟である信行（信勝）との間ですら騙しあいが行われたようなことをみれば、敵はもちろんのこと、主従関係にあっても寝返りや謀略は常識とすらいえ、それが史料として残っている場合もある。

- 36) 信長に関しては、多数の史料などが存在する。その中で、脚色されたことも少なからずある。1959 年に伊勢湾台風の時、愛知県江南市の庄屋で発見された『武功夜話』（吉田蒼生 1987）は、豊臣秀次事件に連座して切腹させられた前野長康を中心に書かれた家伝史料である。ここには他にみられない信長や秀吉の記述があり、2005 年小和田哲男は史料調査をして、偽書でないとしている。また、津本陽や遠藤周作などの小説のモチーフとしても使われている。

加来浩三訳『武功夜話信長』新人物往来社、1991、254 頁

- 37) 小和田哲男『戦国武将』中央公論新社、1981、214 頁
 38) 鋤柄俊夫「土器と陶磁器にみる中世京都文化」、京都文化博物館図録『京都・激動の中世』1996、176 頁
 39) 武田知弘『「桶狭間」は経済戦争だった』青春出版社、2014、208 頁
 40) 水越允治『古記録による 16 世紀の天候記録』東京堂出版、2004、669 頁
 41) 陸軍参謀本部編「日本戦史」付図「桶狭間戦図」、「織田信長と桶狭間の戦い」講談社編『ビジュアル日本の合戦 1』2005、復刻

（本学文学部教授）

The Age of Nobunaga from the Perspective of Environmental History: The Battle of Okehazama

by
Manabu Takahashi

In this article I consider the age of Nobunaga, that is the Sengoku era, from the perspective of environmental history.

From the perspective of environmental history, the beginning of the Sengoku era coincides with that of a “Little Ice Age”. The late 15th and early 16th centuries witnessed famine and peasant revolts. This differs with the famine that occurred in the 8th~9th century, which was caused by drought. Also, vagrant peasants who gathered to towns and revolted started to plunder, thereby gradually turning into *ashigaru* (foot soldiers, mercenaries).

UESUGI Kenshin, TAKEDA Shingen, and IMAGAWA Yoshimoto were all drawn from *shugo* (military governor) families, and heavily depended on *dogo* (local powerful families) for military aid. In times of peace *dogo* worked the land, so there was no separation of soldier and farmer. That is why battles and *Jyoraku* (processions to the capital) were limited to the agricultural off-season. Also, the relationship of lord and retainer was not absolute, and it was not uncommon for the latter to be won over by the enemy and change sides. In addition, since retainers were locally oriented, it was difficult for the Sengoku *daimyo* (feudal lords) to move their bases, i.e. their castles. Furthermore, lords needed to gain the support of the people by investing in flood control and local development if they were to keep in power.

UESUGI Kenshin and TAKEDA Shingen were unable to secure their secondary crops due to severe winter weather, which lead them to invade other domains when famine occurred. And when they were victorious and gained new territories, the *dogo* and *ashigaru* were permitted to plunder as a reward.

IMAGAWA Yoshimoto established land surveys and territorial laws, and was the first to become independent of the ASHIKAGA shogunate and transform himself into a Sengoku *daimyo* of the Middle Ages. TAIGEN Soufu Sessai, who was known as the chancellor in black, played an important role behind the scenes. However, after the death of TAIGEN Soufu Sessai Yoshimoto’s actions become difficult to explain. The timing of his invasion of Owari does not make sense.

The climate had already started to cool when ODA Nobunaga was born. Nobunaga’s family was merely one of three *karo* (chief retainers) under the *shugodai* (deputy governor) of the four counties of Owari. However, Nobunaga built up his strength with the help of the financial power and intelligence of the HOTTA family of Tsushima, KATO family of Atsuta, and IKOMA family of Konan. His first adversaries were members of his own family.

IMAGAWA Yoshimoto’s invasion of Owari took place when Nobunaga had taken control over most of Owari province. Although Nobunaga’s army was small, it was comprised of well-trained standing troops, unlike the soldiers-cum-farmers that made up Yoshimoto’s force. Also, Nobunaga was well aware of the importance of information warfare, and faced the Battle of Okehazama without revealing his strategies even to his allies. By

using his intimate knowledge of the lowlands (valleys) of the hills, he succeeded in concealing himself from Yoshimoto's main army, and with the additional aid of rain, wind and thunder from the north-west, was able to win the battle.